

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

志津川湾を一望できる鎮守の杜の高台にある。鳥居のところから、津波で全てが流出し、その後瓦礫が取り除かれ更地となってしまった町内のようなすが間近に見える。震災から4年弱が経過したが、かさ上げ工事や港湾・道路の復興工事のダンプカーが行き交っている。その中で、骨組みだけが残った高さ12mの防災対策庁舎がひときわ目立つ。この庁舎は現在、震災遺構としての保存の是非が論議されている。

■見どころ

志津川地区の鎮守社として千年近い歴史がある神社で、拝殿には、三歌人絵馬や天井絵が残されている。



上山八幡宮から志津川湾を臨む



鳥居のところまで津波が到達した

震災とその後のようす

■震災後

東日本大震災では、町が想定していた6mをはるかに超える15.9mの津波が押し寄せた。

工藤祐允宮司によると、上山八幡宮も、海拔約17mの鳥居のところまで津波が達し、志津川湾からの瓦礫が押し寄せたため宮司宅が全壊したが、本殿と社務所は無事だった。東日本大震災で津波が到達した地点に、「波来の碑」が立てられている。



「波来の地」碑

地域の人々とのかわり

●例大祭など

工藤宮司は、多数の氏子が被災したので、4月29日の春の例大祭を復興祈願祭に切り替えて行うことにした。その直前に、野々宮神社（滋賀県）の中島信男宮司からジャンボ絵馬が奉納された。畳3畳ほどもある大きな和紙に、無数の寄せ書きが書かれ、真ん中には「列つくり静かに救援物資待つ我が同胞を誇りとしたし」という中島宮司の短歌が書かれている。工藤宮司は、これを町民の方々が避難している避難所や地元のホテルのロビーに飾り、町民を励ましたという。現在



ジャンボ絵馬

は、上山八幡宮に戻り、拝殿に飾られている。

また、震災後、社務所には南三陸町の瓦礫撤去のためボランティアが何人も寝泊まりしていたが、上山八幡宮の瓦礫撤去までには手が回らなかった。工藤宮司が「こんな時だからこそ秋祭りを執り行いたい」と周囲に伝えたところ、インターネットの情報を見て、全国から沢山のボランティアが集まって来た。8月末から神社の瓦礫を片付け始め、あつという間にきれいにしてくれたので、9月15日の秋祭りの神事を無事執り行うことができた。その後も毎年、春と秋の例大祭や年末年始には、氏子だけでなく全国からボランティアが集まって来るようになった。

工藤宮司は、震災翌日から毎日のように、隣町の仮設住宅から上山八幡宮に通い、地域の人々の要望に応える多忙な日々を送っている。志津川高校の元教師だったので、「震災当日、防災対策庁舎に留まって町民へ避難を呼びかけたため犠牲になった職員ら43名のうち26名が教え子だった。防災対策庁舎を見るのが辛い」とも話していた。

また、他の仕事を兼業する宮司が増えており、沿岸地域では、氏子が未だに仮設住宅での生活を余儀なくされていることから、神楽など地域の文化の継承が難しくなっているのが現状であるという。

●きりこ

南三陸地方には、神社の神職が正月の神棚飾りのために、「きりこ」（縁起物を切り抜いた半紙）や飾り幣束などを作って、氏子に配布する風習がある。上山八幡宮の本殿の前にも、工藤宮司が作成した「きりこ」が掲げられていた。

震災から1年後、アートNPOの協力により、「きりこ」を真似て、町民の宝物や思い出などを切絵で表した絵柄を白いボードにして、それぞれの家の跡地に掲げた（きりこプロジェクト）。これらの作品は、現在、南三陸ポータルセンター周辺などに展示され、復興のシンボルとなっている。



本殿前に掲げられた「きりこ」

地域での呼び方「住吉神社」「大島神社」「大嶋神社」

おおしまじんじや 大島神社

所在地住所・行き方

- 住所：石巻市住吉町1-3-1
- 行き方：JR石巻駅の東方約0.5kmの住吉公園を目指す。旧北上川の右岸
- 近くの川、海：旧北上川、石巻湾



縁起・由緒・伝承

■御祭神

式内社 住吉三神（底筒男神、中筒男神、表筒男神）

……航海、港の安全

合祀 八雲神社（須佐之男尊）……健康・家内安全

境内社 八幡神社（弓矢の神）、稲荷神社（五穀の神）、
天満宮（学問の神）、虚空蔵尊の社、愛宕神社（雷神）

■由緒

創祀年代は不明だが、「三代実録」清和天皇貞観5年（863）10月29日の記述に「陸奥国鮎九等飯大島神云云授五位下」とあり、早くから神験あらたかな神として皇室の崇敬をうけていた。郷党住吉大明神と呼ばれ水難防除の神として崇められている。現社殿は宝暦3年（1753）に造営されたものである。明治7年（1874）4月村社とされた。（宮城県神社庁ウェブサイトより）



石巻市文化財マップより

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

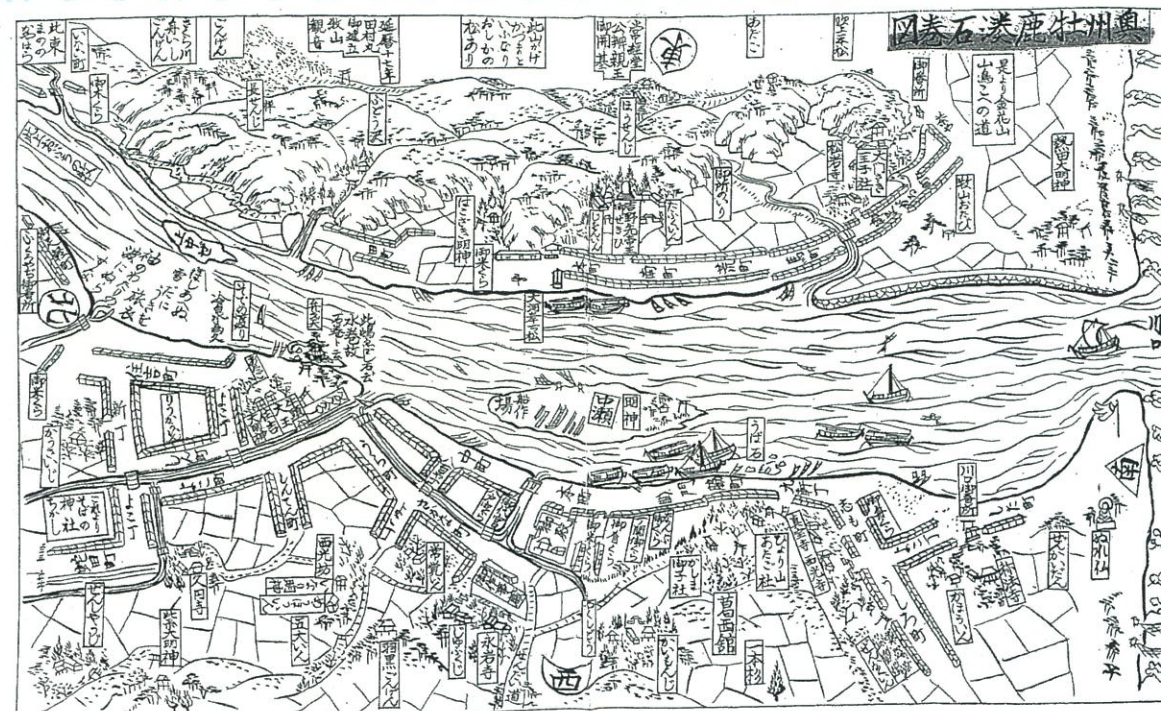
大島神社は住吉公園の中央にあり、公園の東側を旧北上川が流れる。河口に近く、川幅が広いため地面は水面より4～5m高いにもかかわらず川の水面が同一面に見える。公園より対岸を眺めれば八幡町、下流には中瀬橋と石ノ森漫画館が見える。

■見どころ

住吉公園の一角は古来石巻湊と称し、北上川を下ってくる南部、栗原、大崎等の米穀や江戸よりの物産の集散地点であり大いに栄えた。住吉神社はその石巻（牡鹿）湊の守護神として崇敬されてきた。公園内には石巻湊の往時の繁栄を偲ばせるいくつかの遺構が見られる。



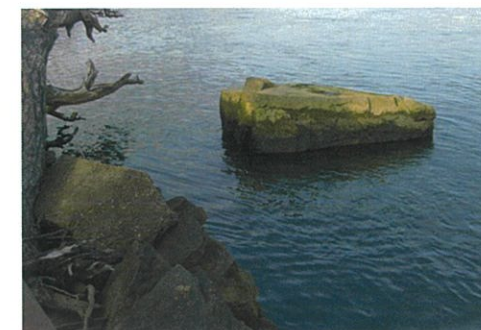
公園から見える石ノ森漫画館



奥州牡鹿湊石巻図享保年間作より

●「巻石」

住吉公園の前、旧北上川の御島（雄島）のすぐ北側にある石で、旧北上川の水がこの石にあたって渦を巻くので巻石とよばれていた。これが石巻という地名の起源とされている。



「石巻」の起源となった「巻石」

●「袖の渡し」の石碑

橋梁架設が不可能な時代には渡川は渡船によるしかなかった。義経が秀衡を頼って平泉へ向かう途中、ここから渡し船に乗った時に船賃代わりに着衣の片袖を切って船頭に与えたことが「袖の渡し」の由来とされている。



「袖の渡し」の石碑

●住吉公園の「下馬石」

特に社寺の境内や城内に車馬を乗り入れることを禁じている場合、その入口に「下馬」或いは「下乗」等と記した制札を立てることがある。大島神社境内入口にある石に「下馬」と刻して「下馬札」の役割をさせているのが見られる。



下馬石

●川村孫兵衛翁紀功碑

川村孫兵衛は伊達政宗に招かれて北上川下流の洪水防御と大崎・栗原よりの物資を石巻に集めるため改修工事を行った。今日の石巻の発展を築いたことを記念し、川村孫兵衛の没後250年にあたる明治30年(1897)に碑が建立された。

大正5年(1916)8月航海安全と石巻開港の恩人、伊達政宗侯と川村孫兵衛に感謝し、市政の発展を願う川開きの行事が始まり、現在も行われている。



川村孫兵衛翁紀功碑

震災とその後のようす

津波の高さは3mほどで鐘樓の鐘の底位まできたが、社殿の床は浸水しなかった。

津波が直撃した雄島は大きな被害を受けた。全体的に地盤沈下が進み、「巻石」が干潮の時は見えるが通常は水面下に沈むことが多くなった。また、玉石組みの護岸が崩れ、川に崩れ落ちそうになっている。シンボルとなっていた松の名木は倒れて枯れてしまった。



鐘樓の鐘の底部まで津波が来た



震災前の雄島(出典：芭蕉庵ドットコム)



震災後 枯れてしまった雄島の松

町内の避難場所は住吉小学校に指定されていたが、高齢者が多かったため、芦野正一氏(住吉町内会会長)の判断で、住吉公園内北側にある標高9mの住吉山の頂上に約40名が避難した。町内で避難訓練をしていたおかげで犠牲者は少なかった。



狭い住吉山頂上に鎮座する愛宕社(雷神)

地域の人々とのかかわり

町内会の公民館が境内にある。また、老人会の役員会は常時社務所で行われており、地域のコミュニティの中心を担ってきた。

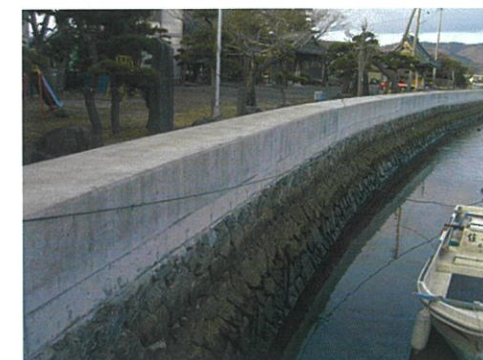
小野泰佑氏(大島神社総代長)によれば、住吉町には震災前に360世帯あったが、震災で引っ越しして現在は260世帯である。100世帯ほどが仮設に入ったり、親戚を頼って出たりしている。戸数の減少は震災前からであり、21年前の平成6年(1994)には氏子が480戸であったから、現状は半分になっている。

北上川の景観を活かした国土交通省の「かわまちづくり事業」には町内会としても積極的に参加し、意見・要望も出しているとのことである。

住吉公園の旧北上川護岸は高さ約2mのコンクリートの壁で防護されている。3.11の津波でその高さが不足であるとの結論が出て、最終的に水面から4.5mの高さにかさ上げを実施するとのことである。



左側の建物は公民館、右が社務所



旧北上川護岸の壁は高さ約2mから4.5mにかさ上げされる

地域での呼び方「白髭神社」

白髭神社

所在地住所・行き方

- 住所：[震災後] 東松島市野蒜字亀岡38
[震災前] 東松島市野蒜字下沼7
- 行き方：JR仙石線旧野蒜駅を背にして右に東名運河沿いに300mほど行ったところに、野蒜コミュニティセンターへの市道がでてくる。右折して最初の交差点を左折すると鳥居が見える。
- 近くの川、海：鳴瀬川・東名運河、松島湾



現在の白髭神社（一の鳥居、二の鳥居、仮本殿）



縁起・由緒・伝承

御祭神

猿田彦大神（航海・導きの神）、布留霊神（石上神社のご祭神で水の神ともいわれる）、天宇受女神（猿田彦と夫婦）

縁起・由緒・伝承

海辺に立地しているため、災難除け、海上安全、交通安全が大きい。昔から農業が主の半農半漁で暮らしてきた地域なので豊作、豊漁、家内安全などの祈願も行われていたのではないかと推察される。境内社として「八大龍王」「五十鈴神社」も末社として祀られており、今回の震災により地元亀岡地区にあった「海津見神社」も移転してくるということであった。社殿は真東金華山の方を向いており、金華山の主神は弁財天で日本三大弁財天の一つであり、いずれも水神に関連している。

御由緒書によれば、御祭神はもともと、鳴瀬川の河口にあった沖の明神、中の明神、岸の明神という3つの小島の頂上にそれぞれ祀られていた。沖の明神が猿田彦大神、中の明神が布留霊神、岸の明神が天宇受女神を祀っていた。伊達政宗の時代に年貢米の輸送船、漁船の船人が顕著な神威に感激して、社殿を建てたが再三激しい波により流失したので、400年ほど前に野蒜下沼に遷座したものという。（白髭神社ウェブサイトより）

宮司の亀廻井家の初代はもと天台宗聖護院の里修験で、三分一所家に招かれて親子で来た。三分一所氏は関ヶ原の戦いで伊達方について京都の方面に出征したことから、比良山系の裏手、琵琶湖に面して祀られている白髭神社を招請した。その宮司として招かれたものである。

海上安全
交通安全

災難除け
清め祓い



震災前の神社の様子
（白髭神社ウェブサイト）

周囲の様子と見どころなど

現在鎮座する野蒜亀岡地区は貞山運河の一部である東名運河を目の前にして、JR仙石線旧野蒜駅より奥松島パークラインを松島側に向かった右手にあり、震災前は東名・野蒜地区の中心地であった。3.11の津波により、多くの住宅が流され、残った家が修理されて点在している。奥松島宮戸島への分岐にあたるため、震災前であれば釣りや海水浴シーズンは引きも切らさぬ車の列となるところであった。

鳥居の前から見た一の鳥居、二の鳥居、仮本殿は、一直線のシンメトリーで美しく、鳥居と社殿は旧社殿と同じように真東、金華山の方に向いて建てられているとのこと。

また、境内社に「針生稲荷神社」、「八大龍王碑」、「巳待塔」、「湯殿山碑」等が移転、集約されてきて、鳥居が建てられている。



接社の針生稲荷神社（左）と石碑群



集約された八大龍王碑などの石碑

震災とその後のようす

震災前の白髭神社の背後には、山の神神社があり津波で堂は2つとも流されたが、渦が鳴瀬川の土手でさえぎられて、御神体は残されていた。

しかし、震災前の下沼前の敷地が防潮堤の整備ルートになったため移転を計画。地区住民らが集団移転する野蒜北陵地区への移転準備を進めたが、敷地確保が困難になり断念。亀岡地区の亀廻井宮司宅の敷地を神社に寄付し、移転先として整備することにしたとのこと。（三陸河北新報）

平成26年（2014）8月の訪問時は亀岡町内会の夏祭りの時であったが、移転した場所を教えられ鳥居がすぐに発見できるほど付近の住家はまばらにしかなく、震災前の世帯は10分の1ほどに減少したとのことである。鳥居と、境内社の八大龍王碑などが移転し、社殿はなかった。その後移転、再建された仮本殿は神社本庁の支援により再建されたそうで、材は伊勢神宮の式年遷宮で使われた用材を分けていただいたとのことであった。

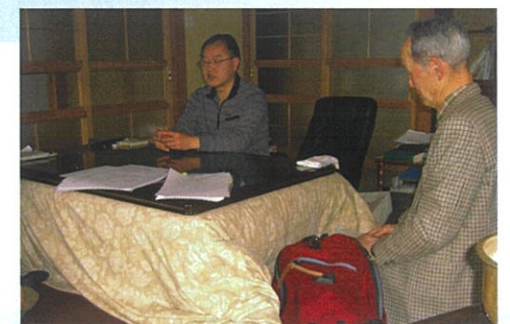
亀廻井宮司によれば下沼地区の山神社、針生地区の針生稲荷神社も既に移転してきた。野蒜亀岡地区で祀っていた海津見神社も被災したが、御神体の毘沙門天像が残っていたので、白髭神社の社殿の脇に並べて再建する予定とのことであった。

海津見神社には仙台藩の古い船宿があり毘沙門天が祀られている毘沙門堂があった。像は鎌倉末期のものらしく、東北歴史博物館に貸し出したことがあるとのこと。明治の神仏分離の時に、宗教的に明確にする必要があったため神社となり、海の守り神である「海津見神社」と名乗った。

地域の人々とのかわり

明治時代の神社制度改革の中では野蒜村の村社となっており、地域のコミュニティの中心地であった。

新しく鎮座することになった野蒜亀岡地区は震災前に450世帯あったが現地に残って自宅の再建をされた方は50世帯ほどで、残りの方は高台移転の意向とのこと。地域のコミュニティ再興にはかなり時間が必要と思われる。



亀廻井宮司にお話を伺った

地域での呼び方「稻荷神社」

浪分神社

所在地住所・行き方

- 住 所：仙台市若林区霞目2丁目15-37
- 行き方：仙台駅前バス停6番より市営バス霞目（遠見塚経由）行きに乗車し、終点霧目で下車。すぐ目の前。
- 近くの川、海：広瀬川、七郷堀、仙台湾

縁起・由緒・伝承

御祭神

うがやふきあえずのみこと
鷺鷥草葺不合尊

縁起・由緒・伝承

旧来「浪分大明神」と呼ばれていたが、明治38年（1905）に「浪分神社」に昇格した。

由緒板によれば、元は稻荷神社といい八瀬川稻荷堂（共同墓地）あたりに在った。昔はもっと広く、高さ2mほどの小丘で樹木も生い繁っていた。ここに隠居、又右衛門の肝いりで村民相集って、元禄16年（1703）8月16日、小祠を創建した。古老の談では、ある時大津波があり、幾波となく押し寄せ多くの溺死者を出したが、やがて白馬に跨った海神が現われて、この大波を南北に二分して鎮めたと伝えられている。以後、稻荷神社に対する津波鎮撫の霊力信仰が高まり、その名も「浪分大明神」と呼ばれるようになった。この辺りは、古来幾度となく津波・洪水にみまわれ、現在の地形ができ、伝説も生まれたのである。天保6年（1835）6月25日の宮城県沖地震（仙台地震、天保大津波）では、仙台領内で数百の民家が流失し溺死者多数と伝えられ、この時に白馬伝承が成立したと言われている。この大津波は、小祠奉獻以来この地を襲った最大のものだった。この年にはこれに続いて閏7月に2回も大洪水があり、天保10年（1839）まで全国的に荒天が続き冷害となった（天保の大飢饉）。この惨事を救うべく当時の神主津田民部は、文化8年（1811）に、それまで村人により祀られて来た庚神・疱神・山神信仰の由緒深い、500m程西方の現在地を卜占



鳥居



石の祠



地震により真横を向いた地蔵尊（修復後）



浪分神社側面（奥に地域の公会堂）

し小祠を奉獻、いぐねを伐ってお堂を建てた。翌天保7年（1836）2月12日、新たに祭神、鷺鷥草葺不合尊のご神体を奉納、石造り神明大鳥居を配し、除災を祈願した。以来、津波の災害が減少したという。

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

横幅10m、長さ20m程の境内に堂宇、拝殿がある。敷地内に町内の集会所（霞の目公会堂）が併設され、社殿の後ろを七郷堀の分流が流れている。周囲は住宅地であるが、昭和40年代前半までは農家が点在する農村地帯で、今でも4月～9月の農作業の時期には、農業用水が流されている。

■見どころ

過去に津波が近くまで到達し、そこから退いて行ったという伝承の残る神社で、東日本大震災後、参拝者（見学者）が急増した。地元の方々にも由来や伝承を知ってもらうため、解説した立札を町内会で建てた。（荒神霞目町内会長談）。この由緒板により、伝承が事実であったことを実感できる。

近くには、地元出身の横綱谷風梶之助の墓がある。



社殿の後ろを流れる農業用水



谷風梶之助の墓

震災とその後のようす

今回の地震による堂宇の建物損壊はほとんどなかったが、子細にみると、上屋の木製土台のコンクリート基礎固定金具が横方向に2cm程せん断変形しており、大きな水平震動を受けたものと考えられる。また、鳥居の前の地蔵は、地震のモメント力により真横を向いてしまったが、台座から落ちずに無事であった。

境内に併設されている公会堂は、土壁作りだったため大規模半壊となった。この公会堂は元七郷村役場だったが、村役場閉鎖の時に七郷農協に払い下げられ、農協の事務所として使われていたものである。事務所の新築に伴い、現在地に移設され霞目町内会の集会所として使用されている。町内会が資金不足のため建て替えはせず、仙台市の助成を使って修復し、土壁が板壁になった。（荒神暁霞目町内会長談）



固定金具のせん断変形による曲り



公会堂内の被災状況

地域の人々とのかかわり

霞の目地域の鎮守の役割も持つ神社でコミュニティの中心地である。団地の形成は昭和40年代頃より始まり、公会堂が境内に併設されている。

荒神町内会長によると、今回の津波は浪分神社までは到達しなかったが、2km海側にある仙台東部道路まで達し、海水の一部は道路下のくぐり穴(ボックスカルバート)を抜けてきたそうである。瓦礫が付近の田んぼに流れ着いているのを見て、言い伝えを実感したとのこと。震災の1年前に七郷市民センターで防災講座があり、東北大学の今村先生より「この地域は昔、津波が来たところなので注意しなければいけない」という話を聞き、町内会として訓練もしていたという。

(付記：公会堂の被災写真2枚は荒神会長より提供)



地震で崩壊した東側土壁



公会堂で荒神町内会会長よりお話を伺う



地域での呼び方「ハッテラさん」「はってら様」

はちだいらゅうおうひ 八大龍王碑



震災後の八大龍王碑 (2015年3月撮影)

所在地住所・行き方

- 住所：仙台市若林区荒浜字中丁36番地33
- 行き方：県道137号線を車で東進、終点の元深沼バス停まで行くと、東日本大震災遭難者慰霊碑が目の前に建つ。その脇に赤い鳥居が海に向かって立っている。
- 近くの川、海：仙台湾、荒浜海岸、貞山堀

縁起・由緒・伝承

■ 御祭神
八大龍王

■ 効験
豊漁・海上安全、降雨・止め雨

縁起・由緒・伝承

碑は江戸時代後期、文政7年(1824)建立され、縁起等詳細は明らかではないが、下に「海上安全当浜中」と刻まれていたため、荒浜集落の漁師関係者(市場・船大工・金物屋)が漁をするときの海難防止を祈願して建立されたものと思われる。龍神碑は、水神として雨乞いや海上交通安全などのために海・川・湖沼等の水辺に建てられていることが多い。

震災前、鳥居の脇に手水鉢が奉納されており、藤島久、二瓶東治の両名の記名があった。これは、船乗りをしていた両名の安全を祈願して、二瓶東治氏の父親が奉納したものであるが、今回の津波により消失している。



東日本大震災遭難者慰霊碑と大きな観音像



被災前の八大龍王碑



手水鉢 (震災前)

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

八大龍王碑が建つ荒浜は仙台市唯一の海水浴場として親しまれてきたが、3.11の津波は樹高10m余の松の木をはるかに超えて襲い、730戸ほどの住宅街を根こそぎさらった。震災前の住人3,400人中187人もの方が犠牲となった地域である。震災直後に居住禁止区域に指定され、現在は亡^{ぼり}寥とした景色である。瓦礫はすっかりと片付けられ防潮堤の工事が始まっている。荒浜再生を願う会の方々がロッジを建てて、復活のシンボルである黄色いハンカチを掲げ、荒浜の再生に向けて活動を進めている。

■見どころ

大きな慰霊の観音像の脇にひっそりとたたずむ鳥居と木製の板碑があるだけで手を合わせる人は少ないが、震災前の荒浜の人々の生業を感じさせてくれる。



かつての住宅地…



荒浜再生を願う会のロッジ

震災とその後のようす

震災前は、「八大龍王」と彫られた2m余りの石碑が赤い社の中に祀られていた。10mを超える津波で小さな社はひとたまりもなく、鳥居と碑だけがその場に残った。社があった場所は大きくえぐられ、八大龍王碑は真っ二つに割れた状態で、そばに置かれていた。

現在、石碑は旧市街の西側、旧神明社跡地に移動され、八大龍王碑の建っていた場所には「八大龍王」と墨書された板碑が立ち、海側に向かって鳥居が建つのみである。



震災前の八大龍王碑



真っ二つに割れた八大龍王碑 (2011年6月撮影)



町内のその他の碑と一緒にされた八大龍王碑

地域の人々とのかかわり

荒浜は農業が主の半農半漁の海浜の集落であった。近年こそ、漁は盛んではなかったが、終戦直後まで魚市場が開かれ、女性らが捕れた魚を背負子で背負い、仙台市内まで売りに通っていた。八大龍王の社は小さいながら、碑は堂々としており、漁師の信仰が厚く、お参りの方々が絶えなかった。地元では「ハッテラサン」や「はってら様」と呼ばれていた。荒浜には元々湊神社、神明社の2つの神社と八大龍王碑があった。八大龍王碑の社は小さかったが祭りは一番賑わっていたという(荒浜再生を願う会 貴田貴一氏談)。隣には南町の集会所が併設され、地域コミュニティの中心でもあったが、居住禁止、集団移転地域に指定され、すべての住民が移転を迫られている。同じ土地に再建できるかどうか、荒浜再生を考える会の懸念材料となっている。

深沼海岸は平坦で遠浅の砂浜ではなく、100mほど沖に行くと急に深くなり、そこに波がぶつかって海水が攪拌されるため、良好な漁場を形成していた。鰯・鯖・鮭の定置網やのり養殖、ほっき貝・波の子貝の貝とり、なかでも赤貝は名産品であり、高値で取引されていた。3.11の津波で多くの漁船が被害を受け、残ったのは5艇だけだったが、12艇まで戻り漁を再開している。

ガレキは海に残っているものの、一方で海がきれいになり、漁も増えているという。同会では、全国からの見学者に漁師の熱い思いを伝え続けている。



社はなくとも鳥居の足元に供えられたお賽銭 (2011年6月撮影)



全国の仲間に漁師の思いを語る荒浜再生を願う会の方々 (2014年8月撮影)

